

国立成育医療研究センターからのアレルギー関連報告紹介

国立成育医療研究センターより 2025 年 10～12 月に公表されたアレルギー関連の報告を紹介しします。

1. 「花粉食物アレルギー症候群」17 歳で 1 割以上に発症

～交差反応でりんご、キウイに特に注意～

<https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1021.html>

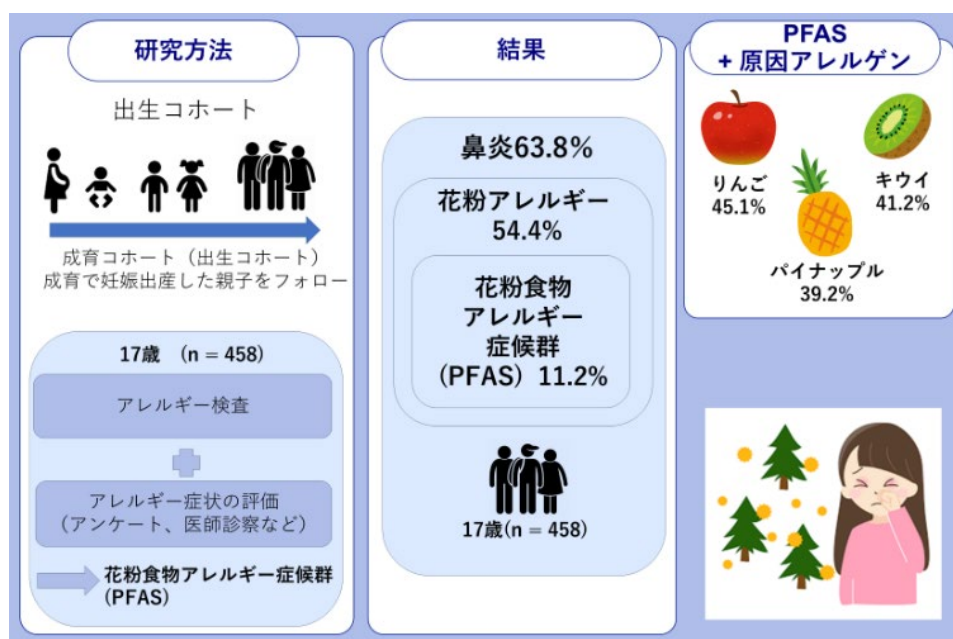
[概要]

花粉食物アレルギー症候群(PFAS：Pollen-Food Allergy Syndrome)は、花粉に対する IgE 感作が進むことで、果物や野菜などの植物性食品を摂取した際にアレルギー症状を呈するもの。まれに全身性のアナフィラキシーを起こすこともある。2003 年からの出生コホート研究の結果、PFAS は 17 歳の青少年の約 11.2%に認められ、原因食品として最も多かったのは、りんご、キウイ、パイナップルだった。本結果は、青少年のアレルギー疾患管理において PFAS を認識することの重要性を改めて強調するものとしている。

Kiguchi T, et al. Prevalence and Sensitization of Pollen-Food Allergy Syndrome Among Adolescents in Tokyo. J Allergy Clin Immunol Glob. 2025

DOI [10.1016/j.jacig.2025.100561](https://doi.org/10.1016/j.jacig.2025.100561)

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/41035676/>



引用：国立成育医療研究センターHP <https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1021.html>

プレスリリース <https://www.ncchd.go.jp/press/assets/1021.pdf>

2. 日本人におけるナッツ類アレルギーを引き起こす摂取量が明らかに

～急増するナッツ類アレルギーは近年、より少ない量で症状が出る傾向に～

<https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1117.html>

〔概要〕

ピーナッツ、カシューナッツ、クルミアレルギーの患者を対象に行われた食物経口負荷試験の結果を基に誘発閾値(ED: eliciting dose)解析を行い、2013～2019年と2020年～2023年のED05値*を比較した結果、2020年以降ではそれ以前と比べて全種においてED05値が大幅に減少していた。このことは、以前より少ない量でアレルギー症状が引き起こされる可能性を示すとし、食物アレルギーのリスク評価を定期的に見直す重要性を改めて認識するものとしている。

*ED05 値：アレルギー患者集団の内、5%の人でアレルギー症状が引き起こされる量
H Kubota, et al. Trends over a decade in the prevalence and eliciting dose of peanut and tree nut allergies in Japan. J Allergy Clin Immunol Glob. 2025

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/41216413/>

DOI : [10.1016/j.jacig.2025.100582](https://doi.org/10.1016/j.jacig.2025.100582)

	2013～2019年	2020年～2023年	全期間
ピーナッツ	8.87mg	4.12mg	4.88mg
カシューナッツ	4.29mg	0.66mg	0.53mg
クルミ	14.94mg	3.26mg	4.37mg

【表：各ナッツ類のアレルギーを引き起こす摂取量（ED05 値）の変化】

引用：国立成育医療研究センターHP <https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1117.html>

プレスリリース <https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1117.pdf>

3. "アレルギーマーチ"に沿ったアレルギー性鼻炎は、遺伝的要因が関係 ～エコチル調査を使った全国大規模調査による報告～

<https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1208.html>

エコチル調査の4歳までのデータを用いて解析を行った結果、アレルギー性鼻炎よりも先に、アトピー性皮膚炎や食物アレルギーを発症していた（アレルギーマーチ）場合、性別（男性）や親のアレルギー歴といった遺伝的な要因がより強く関係し、アレルギー性鼻炎のみを単独で発症している場合は、環境要因がより強く関係していることが示された。

Harama.D et al. Not All Rhinitis Follows the Atopic March: Early-Life Risk Factors and Implications of Infectious Disease Across Three Phenotypes in J ECS Cohort. Allergy. 2025

<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/all.70103?af=R>

プレスリリース <https://www.ncchd.go.jp/press/2025/1208.pdf>